

London, 1962. Vol. II, p. 98.

- (4) J. W. N. Watkins, 'Historical Explanation in the Social Sciences', in P. Gardiner (ed.) *Theories of History*, p. 113.

- (5) M. Weber, 'The meaning of "Ethical Neutrality" in Sociology and Economics'

- (6) G. Myrdal, *The Political Element in the Development of Economic Theory*, tr. by P. Streeten, London, 1953.
(一九七八年八月一七日)

共同研究室

昭和五三年度第一回研究会(五月十二日)

▼テーマ ガルブレイスの学説史方法論

報告者 浜崎正規氏

(報告要旨は第二十七巻・第三号に掲載の予定)

昭和五三年度第二回研究会(六月二日)

▼テーマ 言語と文化比較

報告者 猪谷寛氏

報告要旨

I 差異と同一について

音韻学上、以下の如き事実がある。

例えば、日本人の耳に「あ」と聞える音素が、英語には四種類ある。すなわち、[æ][a][Λ][ə]の四つである。(正確には[Λ

と])は、強勢のあるなしの差に過ぎず三種類と言ってもよい。その結果、英語学習初期の段階にある学習者には、例えば、次の語は、全て同一に聞え、その差異の識別は不可能である。

hat
heart
hurt
hut

は、全て、「ハート」と、聞える。(長短の差は、意味の差を生ずる要素とは、実際上なり得ない。)

その他、日本語の母韻「い」「う」「え」「お」に対応して、英語の意味の差を生ずる音素は、それぞれ複数個存在する。

かくの如く、音素間に意味の差異を生ずる点を、構造言語学において *phonemic points* と呼ぶ。

この事實は「差異と同一」という認識行為が、絶対のものではなく、相対的な心的行為であることを示している。

この英語四種の音素が、全て、日本語「あ」と「同一」であると「認識」することは、とりもなおさず英語内における「差異」の認識不能を意味する。心あらざれば聞けども聞えず、ということになる。

II 認識について

英語で、認識を *recognition* という事實は、示唆的である。接続語「re-」は、「再」の意である。*cognition* とは、精神分析上、意識の謂である。「再び意識する」とは、如何な

ることか。

日本語「あ」は、ひとつの識別パターンである。このパターンは吾人の心身の不可分の一部であり、吾人そのものと言うべく、他の、例えば英語の {æ} {a} {ə} パターンそれぞれとは、「同一」ではない。すでに見たように、「あ」パターンは、英語四種のパターンを、いわば「ひきつけ」てしまふ。「ひきつける」ということは、相手パタンの無視、ないしは、認知不可を示す。吾人が「あ」を「あ」と識別するためには、「あ」パターンが「前もって」存在していなくてはならぬ。「あ」パターンに合致する「音」を聞いたとき、吾人は「あ」と「認識」するのである。人の認識行為とは、ざっと、以上の如きものをその特徴とする。

日本語に「見なす」ということばがある。机を机と「見なし」てこそ、机という実在が認識できる。心理学上の有名な実験で、机という語を与えなければ、幼児は例えば「机」と「椅子」の区別はつかない。机という概念「パターン」がなければ、認識行為は成立しない。言語が、人の認識に果す役割は、他の何者をもつてしても、代えることは不可である。認識とは、「再認識」の謂である。(渡辺慧「認識とパターン」)

音韻論上のみならず、統結論上、認識パタンの相違による、学習上の“phonemic points”は、日英両語間にあって、枚挙に暇がない。

完了形は、時間を幅でとらえる認識パタンである。日本語には、このパタンは存在しない。故に、日本語からの類推は不可である。単複概念も、そうである。冠詞もそうである。

関係代名詞による統語法も、日本語には存しない。代名詞的処理も、日本語には希薄である。

逆に、敬語のパタンは英語にない。又、「だよ」とか「だわ」とか、「ね」とか「や」（関西）のような、情緒パタンともいべきものは、英語には皆無に近い。

語順が英語のイノチだが、日本語ではさにあらず、パラグラフ構成、書物の組み立ても、英語はピラミッド型で、日本語は逆三角形——と並べればキリがない。

Ⅲ 舌、耳、目について

“オフクロの味”は、アミノ酸の味である。日本人がうまいと感ずる味の基礎には、アミノ酸が、重要な役割を果している。外来の食物のうまい、まずいの判定は、実は、吾人の

体中にある「アミノ酸」パタンに合うかどうかの問題に、煎じつめれば、なるらしい。どこの国の料理はマツイとは、いちがいに言えぬということになる。逆に、例えば、イギリス人にとって、タクワンなどは、この世の最も形容しがたき“醜味”の代表かも知れない。認識パタンの相違のなせる技である。（河野友美「味と文化」）

日本語の根底には、四拍子が支配する。

五七調・七五調と云っても、“間”を数に入れば、四拍ないしは、その倍数である。新興の俳句も、そのノリを超えず、釈迦の掌中の小ザルに比すべきものである。散文にしても、四拍に常に収斂せんとする傾向があると云える。

英語は三拍文化である。日本人は、英文を四拍で読もうとし、英米人の話す日本語は、ワルツを踊っている。認識パタンの相違である。（別宮貞徳「日本語のリズム」）

尾形光琳は方円論を唱え、ピカソの絵は三角がその根幹をなす。水墨画の筆法と油絵のそれとは、異なる。梅原竜三郎は、ルノアールを経て、光琳を志向する。梅原は、西洋では認められることがすくないという。認識パタンの相違によるものだろう。

IV 文学について

「老人と海」の結末を、老人は死すべきものと思いこんでいるのが日本人一般であるが、老人は死なない。極度の疲労にあつて、精神は死を拒絶する。日本人読者は、ガツカリして、やがて、記憶は風化し、いつか老人は「自然」に帰ったことにする。

「草枕」において、主人公が「あわれ」と思い、絵になると感ずるのは二箇所、女の自我が消滅した瞬間である。しかし、この絵は日本画であつて、漱石もし西欧の人でありせば、この一篇は、およそ成つたかどうか。認識パタンの相違に基づく。

V パタン・イメージ・イデアについて

この三者は、異名同一のものであると云つてよい。(渡辺 慧「認識とパタン」)

VI 文化比較について

認識パタンが、それぞれの文化内で機能する。否、個有的の認識パタンが存在する人間世界を「文化圏」と呼ぶ。認識パ

タンは、真に保守的である。「見たくないものは」見ず、聞きたくないものは聞かない。おそらく、生物生存のための有効性追求の故であろう。他の生物においてもそうである。カエルはカエル個有的のイメージをもち、桜は桜のイデアをもつと、語弊を恐れず言えば、そうなる。(藤岡喜愛「イメージと人間—精神人類学の視野」)

留意すべきは、己れの認識パタンは、世界共通であるとして「認識」するのも、己れの認識パタンに自縛自縛の結果であることが多い、という事実である。

世に文化論的様々なる意匠が存する。誤謬なきが如くに見えて、時空の制限を受ける。

VII 人間の条件としての言語について

言語は、カオス中に世界を構築する、と云えようか。(鈴木孝夫「ことばと文化」)生物生存のため、認識パタンが存し、人間にあつて、言語が認識パタンの成立と維持と発展のため、不可欠であると断定し得よう。

換言すれば、「言語とは、ものの見方」であり、又「言語とは、文化」である。

昭和五三年度第三回研究会(六月十六日)

▼テーマ アダム・スミスの「自然価格」概念について

——生産価格論の学史的考察——

報告者 岡崎栄松氏

報告要旨

まず、この報告がなされた順序(あるいは項目)を示せば、
つぎのとおりである。

- (1) はじめに——問題の所在
- (2) A・スミスの第一の「自然価格」概念とその意味内容
- (3) A・スミスの第二の「自然価格」概念とその理論的意義

(4) むすび——スミスからリカードウへ

つぎに、この報告の「ねらい」についていえば、それは、
(i) スミス『国富論』(第一篇第七章、第十一章)には、△平均賃金+平均利潤+平均地代▽を意味する第一の「自然価格」概念と、△資本補填分+平均利潤▽を含意する第二の「自然価格」概念とが存在することを明らかにする、そして(ii) 『国富論』におけるこの第一・第二の「自然価格」概念はそれぞれどのような意味内容ないし理論的意義をもっているかを明確

にする、さらに(iii) リカードウはA・スミスのこうした二重の「自然価格」概念のうち、どちらを受け入れ継承したかに言及する、——この三点にあった。これらの点つまり報告内容については、しかし私は、本誌の次号以下に(三回に分けて)掲載される予定の拙稿「アダム・スミスの自然価格論について——生産価格論の学史的考察——」のなかで詳論するので、ここではこの論稿の目次を示すとどめておきたいと思う。

(I) はじめに

(II) A・スミスの狭義の自然価格論

一 スミスの自然価格・市場価格論

二 投下労働説と支配労働説

三 分解価値説と構成価値説

四 第一の「自然価格」概念の意味内容

(III) A・スミスの広義の自然価格論

一 スミスの賃金・利潤論

二 第二の「自然価格」概念とその理論的意義

三 スミス地代論(一)

四 スミス地代論(二)

(IV) 問題の総括